

マルクス・レーニン主義通信

月刊 1部100円

共産主義者同盟(全国委)
マルクス・レーニン主義派

編集発行人 目黒安雄

横浜港南郵便局私書箱16号

振替 横浜3719

頬廻示した総評第五七回大会 による一大飛躍を

七月一五日より始まった第五七回総評定期大会は、「左寄り」路線へ軌道修正して終了した。春闘四連敗に直面した総評は、自らの「存在理由」であった賃上げ闘争に完敗することによって決定的な危機に瀕している。この危機を開拓するための「左寄り」路線は、破産した「国民春闘」＝国民主義を一步も出ることのない日和見主義、改良主義に他ならない。総評大会は、春闘＝総評労働運動の破産に対し、口先だけの「左寄り」＝独占資本との闘い――を叫ぶだけで、混迷し、更に公労協の分裂を公にして終ったのである。

「左寄り」路線への修正

今大会で最も活発に論議されたのは、路線問題をめぐるものであった。総評は昨年の定期大会で、七七春闘での追加減税と予算修正を初め克ちとったことを「国民春闘」の成果だとほ

めちぎり、「連合の時代」を標榜し、労働四団体共闘や公明党などの中道勢力との共闘を謳つた。それは当然にも、保革伯仲国会での野党の運動や野党共闘に労働者の闘いを従属させ、国会による「国民本位」の社会を願望したものであつた。

榎枝一富塚体制による「

現実路線」は、「反自民統一戦線」を最大の結集軸として、減税などの「政策闘争」を中道、新自由クなどとの共闘で自民党に圧力をかけ、なにがしかの成果を期待したのである。労働者の実力闘争と切り離された運動の結果は明らかであつた。このような総評組合主義者の日和見主義的戦術は、その後の一年間の過程で明らかのように完敗に終つたし、終らざるをえなかつた。

榎枝一富塚体制による七八運動方針案は、「連合時代の認識が甘かった」「総評独自の運動も進める」など反省しながらも、基本的に、「自民党の長期低落傾向は明確であり、伯仲の状況は政治的決定的な基盤となっている」という情勢判断に立ち、「あくまで反独占、反自民の立場に立



本号の内容

- ボン首脳会議 // 3頁
- 八・三スモン判決 // 4頁
- 『防衛白書』 // 8頁
- 元号法制化策動 // 8頁
- 仏・スペイン共産党の相克 // 5頁

——第二次ブント総括

マルクス・レーニン主義通信

世界資本主義の危機とボン会議

七月一六・一七日、四回目の首脳会議が西独の首都ボンで開かれた。今回のボン会議の課題は、帝国主義列強間の対立を緩和し、長期化する世界的な不況の克服策をいかに見出すかであった。

そしてそれは、過去三回のランブイエ、サンファン、ロンドン会議においても、最重要課題であったが、彼ら帝国主義列強の首脳は、その都度、景気回復、インフレなき経済成長など、帝国主義列強の「協調」した行動によって達成され、と語ってきたのである。

だが、昨年のロンドン会議での最大のキヤッチフレーズであった「三台の機関車」論——米、日、西独が世界経済回復の主導者として共同行動をとるというもの——の破産は、彼らの主張がペテンにて現実によって証明されたのである(「経常收支赤字七億ドル」を口約した日本は、周知のように黒字一四〇億ドルとなつた)。

しかし、ボン会議後の各首脳は、こそって、こんどこそ「大成功」であると語っている。それはノホルムである。ウイルスを含め、他の病因は認められない」と、さきの金沢判決の中途半端性をも打ち砕き、製薬資本及び國の責任を明確にした。

しかも、自由主義的な立場からではあるが、「各社いずれも、……戦後高度経済成長の波に乗り、通常商品におけると同様、大量販売、大量消費の風潮を助長した」と、日本資本主義—製薬資本のやみくもな成長を告発しているのである。

今日の日本は、スモンの他に、

8・3東京スモン判決の意義

希望の日晚さん会への列席な

ど、日「韓」癒着の重要な役割もはたしているのである。

「薬害」は、資本が商品の使

用価値=有用性にまったく無頓着であるという資本主義的性格

を明示するものである。それは、

公害などあわせて、資本主義

八月三日、東京地裁が言い渡したスモン判決は、原告=患者側の勝訴を明らかにした。

判決は、「スモンの原因はキ

ノホルムである。ウイルスを含

め、他の病因は認められない」

と、さきの金沢判決の中途半端性をも打ち砕き、製薬資本及び國の責任を明確にした。

八・三判決を

「欠陥判決」

といいなし、

及する運動の大きな武器となり

て「ウイルス

説」を固持し、

即刻控訴している。

八・三判決は、製薬資本を追

及する運動の大きな武器となり

て「ウイルス

説」を固持し、

八・三判決を

「欠陥判決」

といいなし、

及する運動の大きな武器となり

て「ウイルス

説」を固持し、

八・三判決を

「欠陥判決」

といいなし、

及する運動の大きな武器となり

て「ウイルス

説」を固持し、

及する運動の大きな武器となり

て「ウイルス

説」を固持し、

八・三判決を

「欠陥判決」

といいなし、

及する運動の大きな武器となり

て「ウイルス

説」を固持し、

八・三判決を

「欠陥判決」

といいなし、

及する運動の大きな武器となり

て「ウイルス

説」を固持し、

及する運動の大きな武器となり

て「ウイルス

説」を固持し、

八・三判決を

「欠陥判決」

といいなし、

及する運動の大きな武器となり

て「ウイルス

説」を固持し、

八・三判決を

「欠陥判決」

といいなし、

及する運動の大きな武器となり

て「ウイルス

説」を固持し、

及する運動の大きな武器となり

て「ウイルス

説」を固持し、

八・三判決を

「欠陥判決」

といいなし、

及する運動の大きな武器となり

て「ウイルス

説」を固持し、

八・三判決を

「欠陥判決」

といいなし、

及する運動の大きな武器となり

て「ウイルス

説」を固持し、

及する運動の大きな武器となり

て「ウイルス

説」を固持し、

八・三判決を

「欠陥判決」

といいなし、

及する運動の大きな武器となり

て「ウイルス

説」を固持し、

八・三判決を

「欠陥判決」

といいなし、

及する運動の大きな武器となり

て「ウイルス

説」を固持し、

及する運動の大きな武器となり

て「ウイルス

説」を固持し、

八・三判決を

「欠陥判決」

といいなし、

及する運動の大きな武器となり

て「ウイルス

説」を固持し、

八・三判決を

「欠陥判決」

といいなし、

及する運動の大きな武器となり

て「ウイルス

説」を固持し、

及する運動の大きな武器となり

て「ウイルス

説」を固持し、

八・三判決を

「欠陥判決」

といいなし、

及する運動の大きな武器となり

て「ウイルス

説」を固持し、

八・三判決を

「欠陥判決」

といいなし、

及する運動の大きな武器となり

て「ウイルス

説」を固持し、

及する運動の大きな武器となり

て「ウイルス

説」を固持し、

八・三判決を

「欠陥判決」

といいなし、

及する運動の大きな武器となり

て「ウイルス

説」を固持し、

八・三判決を

「欠陥判決」

といいなし、

及する運動の大きな武器となり

て「ウイルス

説」を固持し、

及する運動の大きな武器となり

て「ウイルス

説」を固持し、

八・三判決を

「欠陥判決」

といいなし、

及する運動の大きな武器となり

て「ウイルス

説」を固持し、

八・三判決を

「欠陥判決」

といいなし、

及する運動の大きな武器となり

て「ウイルス

説」を固持し、

及する運動の大きな武器となり

て「ウイルス

説」を固持し、

八・三判決を

「欠陥判決」

といいなし、

及する運動の大きな武器となり

て「ウイルス

説」を固持し、

八・三判決を

「欠陥判決」

といいなし、

及する運動の大きな武器となり

て「ウイルス

説」を固持し、

及する運動の大きな武器となり

て「ウイルス

説」を固持し、

八・三判決を

「欠陥判決」

といいなし、

及する運動の大きな武器となり

て「ウイルス

説」を固持し、

八・三判決を

「欠陥判決」

といいなし、

及する運動の大きな武器となり

て「ウイルス

説」を固持し、

及する運動の大きな武器となり

て「ウイルス

説」を固持し、

八・三判決を

「欠陥判決」

といいなし、

及する運動の大きな武器となり

て「ウイルス

説」を固持し、

八・三判決を

「欠陥判決」

といいなし、

及する運動の大きな武器となり

て「ウイルス

説」を固持し、

マルクス・レーニン主義通信

七月二八日、防衛白書「日本の防衛」が発表された。それは、この間の資本家階級の軍事大国への志向を如実に反映したものとなつてゐる。

「いまや軍事化は、公共生活全体に浸透しつつある。軍事化がすべてになりつつある。帝国主義は、世界の分割と再分割のための諸大国の激しい闘争である。だから、帝国主義は、小国といわば、あらゆる国でいっそうの軍事化に導かざるをえない（『プロレタリア革命の軍事綱領』）。

文部省施行の規則

防衛白書は、まず、「国際軍事情勢」の中
で、ソ連の軍事増強を重視している。曰く、
「一九六〇年代以降におけるソ連の軍事力の
増強によって、米ソの軍事バランスとその構
造の内容にある程度の変化をもたらしてきて
いる」、「ソ連海軍力の増強は、アジア大陸
から海で隔てられている島しょ地域の安全保
障にとって無視し得ない要因となつてゐる」
(七月二九日朝日、以下『白書』の引用は同)

そして、このことを論拠に日本も軍事力を増強しなければならないということが説かれるのである。

だが、今日の「国際軍事情勢」の特徴は、ソ連一国の軍事力増強ではなく、すべての国の軍事力増強である。それは、今日の世界が帝国主義体制であることに規定されている。ソ連の現段階は、これまでわが同盟が暴露してきたように、独占が支配し、寄生性と腐朽性が増大し、腐熟期に入っている。従って、

帝国主義列強間の「平和的」同盟は、戦争と戦争とのあいだの「息ぬき」にすぎない。それは、戦争から生まれると同時に戦争を準備するものであり、勢力の相互関係の変化によって再編されざるをえないものである。

防衛自書

全領域での軍事化めざす 「有事立法」と「民間防衛」

このことが、日本帝国主義の侵略と他民族を抑圧を強める途であることは言うまでもない。しかも『白書』は、P3C対潜しよう戦機、F15戦闘機の導入、在日米軍の駐留費の分担増など、『貿易収支大巾黒字』『円高』問題の緩和策とからめて説明しているのである。

たが、これらが、日本資本主義の危機を克服するものではなく、増大する貧困と隸属を減らすどころか、一層強めることであることは火を見るより明らかではないか。

「有事立法」と「民間防衛」

「有効ならしめる関係施策」として提起された「有事立法」と「民間防衛体制」である。このことは、七六年の『大綱』で謳われた基盤的方針(憲法第一項、後遺二項)、二〇〇〇年

「基盤的防衛力構想」が後景に追いたことと
対応している。すなわち、「平和」時の防衛
ではなく、戦争態勢を目指すものとして、今
日の日帝ブルジョアジーの軍事戦略があると
いうことにはならない。

「有事立法」とは、いうまでもなく、戦争（もちろん、内乱も含めて）への自衛隊出動を法制化するものであり、すでに防衛庁など

は朝鮮への派兵もありうると言明している。又、「民間防衛体制」とは、文字通り、公共生活全体の軍事化に他ならず、労働者人民への抑圧が強まることは明白である。

先ごろ、栗栖統幕議長が「自衛隊の超法規的行動」発言で更迭されたが、福田・自民党は、この栗栖問題をもテコとして、「有事立法」と「民間防衛体制」を推進せんとしている。

る（七・二七国防會議議員懇談会での福田指示）。中曾根に至っては、栗林の解任に對して「残念なことだ」と語り、「いまや、タブーであった問題に挑戦すべきときが来た」と

露骨にその方向を表明している。
しかも、『白書』が「最近では防衛問題を
現実に即してとらえようとする傾向が強まつ
た」と述べているように、野党の「柔軟さ」

政策変化を理由に今日の攻撃がかけられてはいることに注意しなければならない。
もとより、労働者は「シビリアン・コントロール」（文民統制）などに幻想をいだくことはできない。古今東西、あらゆる階級社会において、常備軍（及び民兵）は、常に支配者階級の武装であった。このことを忘れる者は

は、階級闘争を放棄する者である。労働者は社共の小ブルジョア的平和主義とまったく無縁である。彼らは、軍備の撤廃を叫び、戦争一般に反対する。そのようにして彼らは、労働者階級の武装を解除するよう説教しているのだ。

「プロレタリアートに対抗するブルジョアジー」の武装は、今日の資本主義社会における最大の、もっとも根本的な、もっとも重要な事実の一つである。――われわれのスローガン

カンはつぎのようでなければならない、ブルジョアジーにうち勝ち、彼らを取奪し、武装解除するためのプロレタリアートの武装、とこれこそ、革命的階級のただ一つ取りうる職

術であり、資本主義的軍国主義の客観的発展全体から生じ、この発展によつて指定されてゐる戦術である。プロレタリアートは、ブル

ショアジーを武装解除したのちにはじめて自分の世界史的任務を裏切らずに、およそあらゆる武器を屑鉄にしてしまうことができる。そのときにはじめて——だが、そのままにではよけつてしまなくて——プロレタリアートはここ

かにそうするであろう」(「軍備撤廃」のスローガンについて)。

マルクス・レーニン主義通信

どのようにして「第二期」を清算すべきか

第一次ブント総括

連載第19回

目

次

はじめに

第一章 第一期（六一年一六年）関西ブントの思想形成

第二章

第一部 ゲオルグ・ルカーチ批判

はじめに

△一△ ルカーチの世界観

△二△ ルカーチの政治的性格

第二部 グラムシ批判

△一△ 社会学的「市民社会・國家」論（以上前号）

△二△ 「受動的革命」と統一戦線

△三△ グラムシの組織論（本号）

第三章 第二期（六六年一六九年）関西ブントの実践過程

第四章 ブハーリン、ローザ批判

第五章 第三期（六九年以降）関西ブントの思想的、実践的分解

「受動的革命」と統一戦線

前節で見たようなグラムシの理論からは、不可避的に、觀念的、日和見主義的な階級闘争観－戦術が導き出されるえない。G・フィオーリ（『グラムシの生涯』の著者）は次のように述べている、「グラムシにとって、問題は、いかにして支配階級が従属階級の合意を得るために成功したか、またこれら従属階級は、いかにして旧秩序を破壊し、万人にとっての自由であるところの新しい秩序をうちたてることができるか、という点にある」と。そして、それが「マルクス主義の経済主義的、機械論的、宿命論的墮落」の克服の途である、と。

かくして、かの「ヘゲモニー論」がそれに解答を与えるのである。「ある社会集団の霸権は『支配』おより『知的道徳的指導』といふ二つの様式で現われる。ある社会集団は、それが武装力に訴えても一掃し」あるいは服従させようとするとする敵対諸集団にたいして支配的であり、そして近親の同盟諸集団にたいして指導的である。ある社会集団は統治権力を獲得する以前から、すでに指導的であります。また指導的であらねばならない。

△二△ その後に、権力を行使するとともに、またこの権力を強力に掌り、初めてしめたボルシェビズムの見解の重要性が、ほかならぬイタリアでは一九二〇年九月の工場

占拠以降に現われている。…労働者の援助なしに、農民は土地を握っているばかりでさえも、その社会集団は支配的になつてはいるが、しかし、やはり「指導的」であります。つまり「同意」と「同意」指導」である。このように、「同意の確保」（竹村英輔）と「同意の思想」の強調からして、グラムシの言う「ヘゲモニー」とは、「知的・道徳的指導・変革」の要素が前面にでているものである。従って、結論的に言えば、それは、階級闘争を知的・道徳的変革にすりかえるものに他ならない。

△二△ それと並んで、それが「マルクス主義の経済主義的、機械論的、宿命論的墮落」の克服の途である、と。

かくして、かの「ヘゲモニー論」が、グラムシの政治的独創性、かれの主要な特徴はどこにあるか。ボルシェビズムは国際階級闘争史で初めて

△二△ プロレタリアートのヘゲモニーの観念を展開し、マルクス・エンゲルスが理論的に予期した革命の主張を実践的に提起した」、重要な諸問題を実践的に提起した」、

として統一戦線を考えていた。一九二四年六月一〇日のマッテオッティ事件を機に形成されたアヴェンティーノ諸派は、「ムッソリニが憲法上の合法性の再興を保證されすれば政府を支持してもよい」という、本質的に半ファシズム的な一翼から、大衆に訴えかけて政府を打倒しようとする小党派：

△二△ すなわち共産党まで、連合し

△二△ (G・フィオーリ)たものであつて、「しつこい喊声」（ムッソリニ）以上ではなく、グラムシは、積極的な野党統一戦線を提案して

いた。

△二△

マルクス・レーニン主義通信

してそうであろうか。

一九三一年六月二二日—七月一
二日に開催されたコミニテルン第三回大会は、情勢分析における、「労働者階級の一連の蜂起と闘争が部分的敗北をもつて終結した」、アの公然とした革命的闘争が多く、の国々で、緩慢になっていることは争いえない」という革命情勢の退潮に対応して、「労働者階級の多数にたいする圧倒的影響力を獲得すること、彼らの決定的部分を闘争にひきいれること」が緊要であるとし、共産党の大衆化と「ブ

レロタリア統一戦線」——「大衆の中へ！」をスローガンとした統一戦線戦術を採用したのであった。レーニンは、この大会で、「戦術の再検討に着手する」という戦術テーマを「左」派から擁護する演説を行うと同時に、「この一年間の国際革命の発展がわれわれの期待したほど一直線にはすさまなかた」「いま必要なことは、革

命を根本的に準備し、先進的な資本主義諸国における革命的具体的な発展をふくく研究することである」（全集三三巻）と述べ、戦術テーマは「妥協である」と語っている。又、レーニンは別のところでも、「第二および第二半インター

シヨナルの代表にとって統一戦線が必要なのは、われわれに度はず、された譲歩をさせてわれわれをよわめようとのぞんでいるからである。彼らは、入場料をなにもはらわずに、われわれ共産主義者の会場にはいりこみたがっており、統一戦線戦術によつて、改良主義的戦術が正しく革命的戦術が誤っている。わかれに統一戦

が必要なのは、われわれがその反対のことを労働者に納得させたがれば、「中間目標の転換と、政

治路線から防衛路線への移行、民衆的主要な支柱」（同三三巻）たる「改良主義者に完全に支配された」、「改

革主義者に完全に支配されてきた」労働者に、たとえわずかでも呼びかけるいくらかの機会がえられるような会場にはいるた

め」（同三三巻）の「入场料」であると述べている。

だが、一年後のコミニテルン第

四回大会になると様相を異にして

统一戦線政府を、等々。

だが、グラムシの、先にみたア

ニノビエフ報告は、「資本主義

にたいする労働大衆の部分要求」

が採用されたのもこの大会である。

そして、トロツキーが起草した

「戦術テーマ」は、「統一戦線戦術とは、広範な労働者大衆が彼らのものとも重要な死活となる利益

のためにおこなう日常闘争において、共産主義的前衛が先導するこ

とを意味する」、「統一戦線戦

術は、他の党派またはグループに属するあらゆる労働者と共産主義者との、および無党派のあらゆる労働者と共産主義者との、アルジヨ

正主義の立場から継承したトリア

ッティに指導されたイタリア（及

びフランス）の反ファシズモ統一

戦線、人民戦線の追認としてコミニテルン第七回大会の基調があつたのである。

グラムシによる「完成」された

統一戦線論は、まさに「国民革命」論であり、労働者階級に「小」アルジヨアジーとの協調を説くもの

である。それは、何万べん「プロ

レタリアートのヘゲモニー」を語

ったところで正当化されるもので

はない。

このグラムシの「完成」に大き

く寄与したのが「受動的革命」論

であった。グラムシは次のように

言つて、「『受動的革命』の概念は、

つきの二つの社会科学の基本原則

から、厳密に演えきされるはずで

る」などといつてゐる。

しかし、その内部に発展してきた生産

トリによるそのガイストの説明に、諸方が、まだその前進運動にとつての余地を見出すときには、けつて消滅しない、という原則。（

2）社会は、その解決のための必

要条件が含まれていないような課題を提起しない、という原則。

統一戦線戦術は、「工業的に発展

した資本主義諸国における資本主

義的主要な支柱」（同三三巻）た

かでも呼びかけるいくらかの機会

が現われているのみならず、性格が現われているのみならず、

らなるトロツキーの日和見主義的

性格が現われているのみならず、

されなければならない」、「リソ

ルジメント期イタリアの「受動的

革命」、「革命一復古」の概念に

まず統一戦線政府を、等々。

だが、グラムシの、先にみたア

ニノビエフ報告は、「資本主義

にたいする労働大衆の部分要求」

れよりも進んでいた。グラムシの

それは、一九三四年のコミニテル

ン第七回大会での「反ファシズ

ム」、統一戦線と共通性をもつもので

ある。否、グラムシの精神を、修

かんしては、いつでもつぎのこと

に注意しておくことが必要である。

すなわち、いくつかの歴史学派で

いうところの、歴史事件における

主体的条件と客観的条件の関係の

問題を、正確なしかたで提起しな

ければならない、ということであ

る」。

正主義の立場から継承したトリア

ッティに指導されたイタリア（及

びフランス）の反ファシズモ統一

戦線、人民戦線の追認としてコミニテルン第七回大会の基調があつたのである。

グラムシによる「完成」された

統一戦線論は、まさに「国民革命」

及び「鉄のような経済決定論の一

形態」たるローラーの機械論、運

命論を排すると同時に、今日の状

況から「陣地戦」を主張するので

ある。

グラムシは言つて、「そうした「

高度に発達した」諸国では、「市民社会」はひじょうに複雑な、ま

た直接に経済的因素（恐慌、不景

氣等）の破局的な「侵入」にたい

してねばりづよく抵抗する構造に

なつてゐる。この市民社会の上部

構造は、近代戦におけるざんぐ

して敵の防御体制を完全に破壊したよ

うにみえて、ただそらみえるだ

けで、じつはその外觀を破壊した

鉄鎖を碎け

●特集 共産主義者同盟系諸組織の批判

第2号 発売中

500円

■「烽火」派批判

観念的に「非合法党」を叫び、歴史を逆にまわそうとする戦闘主義

■ボルシェビキ派批判

「红旗」派の分裂はすでに用意されていた——全国委員会を清算した観念的思想サーカル

■赤報」派批判

共産主義的宣伝、煽動を放棄し、一面的非法活動に埋没した密教集団

■赤軍プロ革派・ML派批判

革命戦争路線をすてきれない赤軍二派

創刊号 発売中

わが同盟の軌跡 500円

(7) 1978年8月10日

マルクス・レーニン主義通信

にすぎず、いざ攻撃、前進というときになると、攻撃側は、なおも強力な防御線に直面することになる……」

「だから、市民社会において、陣地線での防御体制に照應する諸要素がどのようなものであるかを、『深く』研究することが重要である」

「機動戦は一九一七年に東方に適用されて輝かしい勝利をおさめ、一方、陣地戦は西方で唯一の可能形態であった」

「東方では、国家はすべてであり、市民社会は幼稚でゼラチン状のものであった。ところが西方では、国家と市民社会とのあいだに正確な関係があり、国家が動搖するとすぐに市民社会の頑強な構造が姿をあらわした」

「この『『永久革命』』定式は、大政党も大経済組合もまだ存在せず、社会がまだ多様な姿をしめす流動状態にあった。一つの歴史時代に特有のものである。……一八七〇年以後の時代には、ヨーロッパの植民地主義的膨張にともない、これらの要素はすっかり変化し、国家の国内的、国際的組織関係はより複雑に、より巨大になり、一八四八年当時の『永久革命』の定式は、政治学のかで仕上げられ、克服されて『市民的ヘゲモニー』の定式となつた。」

軍事技術においては、機動戦はしだいに陣地戦となり、一国が勝利をおさめるには平和の時期から戦争を細心に技術的に準備しておかなければならぬ、といわれるようになつたが、それと同じことが政治技術のなかにも生じた。近代民主主義の巨大な構造は、國家組織としても、文化生活のなかの各種結社の総体としても、政治技術にとっては、陣地戦のために構築された『さんごう』や要塞のようなものである。それは、以前には戦争の『すべて』であつた機動戦を、たんに『部分的』なものに変えてしまつてゐる。

何と、先進諸国では、武装蜂起一プロレタリア独裁は不可能で、漸進的改革だけが、統一戦線を通じたプロレタリアートの「ヘゲモニー」の拡大だけが絶対だと言うのだ。ロシア革命を「『資本論』」に反する革命」と評したグラムシは、「ボリシエビギはカール・マ

ルクスを否定し」（同）たと語つときになると、攻撃側は、なおも強力な防御線に直面することになる……」

「否定」したのであつた。

『グラムシの政治思想』の著者J·M·ピオットは、レーニンの思想とグラムシの思想の相違を通して、第三回大会の『統一戦線』が状況変化の分析をしか反射していないとすれば、

グラムシの戦略は、工業化された國と、そうでない國のあいだの構成的差異にもとづくものである。

「東方では、国家はすべてであり、市民社会は幼稚でゼラチン状のものであった。ところが西方では、

国家と市民社会とのあいだに正確な関係があり、国家が動搖するとすぐに市民社会の頑強な構造が姿をあらわした」

「この『『永久革命』』定式は、大政党も大経済組合もまだ存在せず、社会がまだ多様な姿をしめす流動状態にあった。一つの歴史時代に特有のものである。……一八七〇年以後の時代には、ヨーロッパの植民地主義的膨張にともない、これらの要素はすっかり変化し、国家の国内的、国際的組織関係はより複雑に、より巨大になり、一八四八年当時の『永久革命』の定式は、政治学のかで仕上げられ、克服されて『市民的ヘゲモニー』の定式となつた。」

軍事技術においては、機動戦はしだいに陣地戦となり、一国が勝利をおさめるには平和の時期から戦争を細心に技術的に準備しておかなければならぬ、といわれるようになつたが、それと同じことが政治技術のなかにも生じた。近代民主主義の巨大な構造は、國家組織としても、文化生活のなかの各種結社の総体としても、政治技術にとっては、陣地戦のために構築された『さんごう』や要塞のようなものである。それは、以前には戦争の『すべて』であつた機動戦を、たんに『部分的』のものに変えてしまつてゐる。

何と、先進諸国では、武装蜂起一プロレタリア独裁は不可能で、漸進的改革だけが、統一戦線を通じたプロレタリアートの「ヘゲモニー」の拡大だけが絶対だと言うのだ。ロシア革命を「『資本論』」に反する革命」と評したグラムシは、「ボリシエビギはカール・マ

ルクスを否定し」（同）たと語つときになると、攻撃側は、なおも強力な防御線に直面することになる……」

「否定」したのであつた。

『グラムシの政治思想』の著者J·M·ピオットは、レーニンの思想とグラムシの思想の相違を通して、第三回大会の『統一戦線』が状況変化の分析をしか反射していないとすれば、

グラムシの戦略は、工業化された國と、そうでない國のあいだの構成的差異にもとづくものである。

「東方では、国家はすべてであり、市民社会は幼稚でゼラチン状のものであった。ところが西方では、

国家と市民社会とのあいだに正確な関係があり、国家が動搖するとすぐに市民社会の頑強な構造が姿をあらわした」

「この『『永久革命』』定式は、大政党も大経済組合もまだ存在せず、社会がまだ多様な姿をしめす流動状態にあった。一つの歴史時代に特有のものである。……一八七〇年以後の時代には、ヨーロッパの植民地主義的膨張にともない、これらの要素はすっかり変化し、国家の国内的、国際的組織関係はより複雑に、より巨大になり、一八四八年当時の『永久革命』の定式は、政治学のかで仕上げられ、克服されて『市民的ヘゲモニー』の定式となつた。」

軍事技術においては、機動戦はしだいに陣地戦となり、一国が勝利をおさめるには平和の時期から戦争を細心に技術的に準備しておかなければならぬ、といわれるようになつたが、それと同じことが政治技術のなかにも生じた。近代民主主義の巨大な構造は、國家組織としても、文化生活のなかの各種結社の総体としても、政治技術にとっては、陣地戦のために構築された『さんごう』や要塞のようなものである。それは、以前には戦争の『すべて』であつた機動戦を、たんに『部分的』のものに変えてしまつてゐる。

何と、先進諸国では、武装蜂起一プロレタリア独裁は不可能で、漸進的改革だけが、統一戦線を通じたプロレタリアートの「ヘゲモニー」の拡大だけが絶対だと言うのだ。ロシア革命を「『資本論』」に反する革命」と評したグラムシは、「ボリシエビギはカール・マ

ルクスを否定し」（同）たと語つときになると、攻撃側は、なおも強力な防御線に直面することになる……」

「否定」したのであつた。

『グラムシの政治思想』の著者J·M·ピオットは、レーニンの思想とグラムシの思想の相違を通して、第三回大会の『統一戦線』が状況変化の分析をしか反射していないとすれば、

グラムシの戦略は、工業化された國と、そうでない國のあいだの構成的差異にもとづくものである。

「東方では、国家はすべてであり、市民社会は幼稚でゼラチン状のものであった。ところが西方では、

国家と市民社会とのあいだに正確な関係があり、国家が動搖するとすぐに市民社会の頑強な構造が姿をあらわした」

「この『『永久革命』』定式は、大政党も大経済組合もまだ存在せず、社会がまだ多様な姿をしめす流動状態にあった。一つの歴史時代に特有のものである。……一八七〇年以後の時代には、ヨーロッパの植民地主義的膨張にともない、これらの要素はすっかり変化し、国家の国内的、国際的組織関係はより複雑に、より巨大になり、一八四八年当時の『永久革命』の定式は、政治学のかで仕上げられ、克服されて『市民的ヘゲモニー』の定式となつた。」

軍事技術においては、機動戦はしだいに陣地戦となり、一国が勝利をおさめるには平和の時期から戦争を細心に技術的に準備しておかなければならぬ、といわれるようになつたが、それと同じことが政治技術のなかにも生じた。近代民主主義の巨大な構造は、國家組織としても、文化生活のなかの各種結社の総体としても、政治技術にとっては、陣地戦のために構築された『さんごう』や要塞のようなものである。それは、以前には戦争の『すべて』であつた機動戦を、たんに『部分的』のものに変えてしまつてゐる。

何と、先進諸国では、武装蜂起一プロレタリア独裁は不可能で、漸進的改革だけが、統一戦線を通じたプロレタリアートの「ヘゲモニー」の拡大だけが絶対だと言うのだ。ロシア革命を「『資本論』」に反する革命」と評したグラムシは、「ボリシエビギはカール・マ

ルクスを否定し」（同）たと語つときになると、攻撃側は、なおも強力な防御線に直面することになる……」

「否定」したのであつた。

『グラムシの政治思想』の著者J·M·ピオットは、レーニンの思想とグラムシの思想の相違を通して、第三回大会の『統一戦線』が状況変化の分析をしか反射していないとすれば、

グラムシの戦略は、工業化された國と、そうでない國のあいだの構成的差異にもとづくものである。

「東方では、国家はすべてであり、市民社会は幼稚でゼラチン状のものであった。ところが西方では、

国家と市民社会とのあいだに正確な関係があり、国家が動搖するとすぐに市民社会の頑強な構造が姿をあらわした」

「この『『永久革命』』定式は、大政党も大経済組合もまだ存在せず、社会がまだ多様な姿をしめす流動状態にあった。一つの歴史時代に特有のものである。……一八七〇年以後の時代には、ヨーロッパの植民地主義的膨張にともない、これらの要素はすっかり変化し、国家の国内的、国際的組織関係はより複雑に、より巨大になり、一八四八年当時の『永久革命』の定式は、政治学のかで仕上げられ、克服されて『市民的ヘゲモニー』の定式となつた。」

軍事技術においては、機動戦はしだいに陣地戦となり、一国が勝利をおさめるには平和の時期から戦争を細心に技術的に準備しておかなければならぬ、といわれるようになつたが、それと同じことが政治技術のなかにも生じた。近代民主主義の巨大な構造は、國家組織としても、文化生活のなかの各種結社の総体としても、政治技術にとっては、陣地戦のために構築された『さんごう』や要塞のようなものである。それは、以前には戦争の『すべて』であつた機動戦を、たんに『部分的』のものに変えてしまつてゐる。

何と、先進諸国では、武装蜂起一プロレタリア独裁は不可能で、漸進的改革だけが、統一戦線を通じたプロレタリアートの「ヘゲモニー」の拡大だけが絶対だと言うのだ。ロシア革命を「『資本論』」に反する革命」と評したグラムシは、「ボリシエビギはカール・マ

元号法制化の反動的策動を粉碎せよ

近ごろ、元号法制化を求める反動派の策動が、とみに加速化されている。

まず、「神道政治連盟」や「生長の家」などの反動的宗教団体が積極的に動き、今春までに三六府県議会、三百ほどの市町村議会で元号法制化を求める決議や請願の採択を実現するとともに、これを背景にして、五月三日、「元号法制化実現国民大会」が開かれた。

そして、このような民間の運動の「高まり」を理由に、六月一四日、「元号法制化促進国会議員連盟」が設立されたのである。これには、自民、民社、新自由クラブを中心に四百十一人が参加しており、とくに民社、新自由クは党議決定の上の全員参加であった。国民党のあいさつでも、国民党は「法制化」の言葉を避けたのに対して、民社、新自由クは、「これほど巨大な声が現われた以上、政府はちゅうちよなく（法制化の）答えを出すべし」と強硬な主張を行い、まさに元号法制化の尖兵となっているのである。

このような中で、七月一八日、国民党は、「次の通常国会での法制化」を党議決定し、同じ日に「元号法制化実現国民會議」が結成された。又、同二四日、政府も稻村総務長官が事務当局に検討作業の開始を指示した。

これらの動きが、労働者人民に対する挑戦であることは明白である。中曾根が、自衛隊」「防衛」問題について「いまや、タブーであった問題に挑戦すべきときがきた」と語ったのと軌を一にして、「タブー」に挑んでいるのである。

反動派が主張している「一世一元」、すなわち、を論じている。

それによると、七月三一日、スペイン共産党のアスカラーテは、三月の仏選挙での左翼連合敗北（『通信』三七・三八合併号参照）故に、「私たちは仏共産党とは違って、中産階級との協調を求める」と述べていた。だが、フランス共産党とスペイン共産党とのあいだには、何ら本質的違いはない。すなわち、プロレタリ

仏・スペイン共産党の相克

八月五日付の毎日新聞は、「国境を超えたなかったユーロヨミュニズム」と題して、「スペインの欧州共同体（EC）加盟をめぐって生じたフランス共産党とスペイン共産党の対立」を論じている。

それによると、七月三一日、スペイン共産党のアスカラーテ中央委員は、仏共産党はECを「特權的国家のクラブ」にしようとしていると批判し、「視野の狭い排外的な愛國主義」は「反動の魔をよみがえらせるもの」と決めつけたという。

すでにアスカラーテは、三月の仏選挙での左翼連合敗北（『通信』三七・三八合併号参照）故に、「私たちは仏共産党とは違って、中産階級との協調を求める」と述べていた。だが、フランス共産党とスペイン共産党とのあいだには、何ら本質的違いはない。すなわち、プロレタリ

ア独裁を否定し、（小）ブルジョアとの協調を求めるという点では全く同じなのである。仏共産党は、実際には限りなく接近している社民主義に対して、いくらかでも左翼的に見せようとしているにすぎない。

だが、（小）ブルジョアに身も心も売りわたったスペイン共産党にしてみれば、このような仏共産党の不徹底さが我慢ならないのである。その意味では、スペイン共産党は、確かに仏共産党の矛盾を突いている。とはいって、両党の根本的な問題が、修正主義、日和見主義であるか

何の歴史的根柢ももたない。そのようになったのは、明治維新以降のことなのである。反動派は、常に天皇（制）を結集軸としてきた。そして、元号法制化の攻撃は、反動派の勢力をより強固にするとともに、民族主義を煽り、「国民」的な統合をかちとらんとするものに他ならない。

本年初頭、福田は「防衛の根本は、国民自らの祖国を守る気概であり、国民的合意」であると謳い上げた。議員連盟会長西村常治は、元号は「東洋独特的民族意識」、「元号の尊厳、権威」を謳っている。

然り、元号は中国のものをまねたものであり（今日、中国では一九一二年以降使われていない）、それが結びつけられて明治維新以降「國家神道」にまで昇華した天皇（制）イデオロギーは、徹底してアジア的、反動的なものである。元号法制化は、天皇（一族）の政治へのかつぎだし、「国歌、国旗」問題などの教育の反動化、等々と一体となって、労働者人民の階級意識を解体し、非合理主義的なイデオロギーをもつてする「国民統合」の攻撃なのである。

だとするならば、社会愛国主義者たる社会党、共産党が、徹底して反対することができないのは理の当然である。労働者人民は、このような民族主義への屈伏を排し、元号法制化策動を粉碎しなければならない。

なお、今日、いわゆる新左翼のなかで、かつての「戦略」型革命を克服するのに、人民の統一戦線をもつてしようとする人々が毛沢東主義に屈伏した部分のみならず登場してきているが、グラムシの戦術をみればわかるように、先駆的な「統一戦線」は別の革命「戦略」への転換でしかないということが理解できるだろう。問われているのは、綱領、戦術、組織總体にわたってマルクス・レーニン主義を貫徹することなのである。

前号の訂正

前号の「どのようにして「第三期」を清算すべきか」論文において、内容上の理解に影響のある誤植がありました。

前号七頁、三段目、後から六行目の「独裁論」を「独我論」に訂正します。

「前ページから続く」

「一貫した、主要な要素」「中間の要素」の三要素の「定比」や、「上級指揮・下級指揮・被統治者」の「三層論」の抽象的な図式に堕してしまった。

以上のように簡単に素描したグラムシの組織論は、ルカーチのそれと同じように、社会学的には意味があるとしても、実践的には価値を有しないものである。